

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：32660

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2013

課題番号：21730527

研究課題名(和文) 乳幼児の自己主張行動と親の両義的応答の共同発達過程：親の心理社会的状況の視点から

研究課題名(英文) The mutual growth process of infant's self-assertion actions and mother's ambiguous responses: From the viewpoint of mother's psycho-social backgrounds.

研究代表者

竹尾 和子 (Takeo, Kazuko)

東京理科大学・理学部・講師

研究者番号：30366421

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、2歳の幼児とその母親を対象に幼児が5歳に達するまでの縦断調査を実施した。一回の調査はインタビュー調査と実験調査により構成される。インタビュー調査は日常での幼児の自己主張・自己抑制行動とそれへの母親の応答や感情、さらに、その背景となる母親の心理社会的状況について聞き取るインタビュー1、および実験での母子の様子を振り返り語ってもらうインタビュー2により構成される。実験では母子でパズルに取り組んでもらい、そこでの母子のやりとりを記録した。これにより、母子の共同発達過程の一側面としての幼児の自己制御機能の発達過程をその背景となる母の認知的枠組みや心理社会的状況の影響をも含めて明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this research, we have conducted longitudinal investigations on the mutual growth process of infants and their mothers during the ages from 2 to 5. The investigations consisted of interviews and experiments as follows. In the interview, we first asked the mothers about their responses and feelings to the children's self-assertion and self-regulatory actions, and their underlying psycho-social backgrounds. After the experiments detailed below, we again had interviews about the mothers' and children's behaviors during the experiments. In the experiments, we recorded and observed the communications between the mothers and children while they played puzzles. Through the investigations, we have demonstrated, as an aspect of the mutual growth process of the mothers and children, the impact of the mothers' cognitive views and psycho-social backgrounds on the development of the children's self-regulatory functions.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：幼児の自己制御機能 親子の共同発達過程 自己主張・自己抑制行動 親の心理社会的状況

1. 研究開始当初の背景

幼児期の子どもの社会性や社会的自己の発達に注目した諸研究では、この時期の要求や拒否、かんしゃくやダダこね、いたずらのような不従順な行動など、種々の自己の欲求を主張する行動が検討され (e. g. Bruner, et al., 1982; 本郷, 1994; 木下, 1987; Kochanska, et al. 1998; Wernar, 1982; 山田, 1982)、幼児の自己主張行動は社会的自己の発達の里程標の一つとして注目されてきた (Mahler, et al., 1975, 1981; Spitz, 1957)。最近では、子ども自身に焦点をあてた研究 (e. g. 柏木, 1988; Wernar, 1982) から、子どもへの親の応答や親子関係に焦点をあてた研究が多く見られるようになり (川田, 2005; 坂上, 2003; 高濱他, 2008; 氏家, 1995; Ujiie, 1997)、他者との関係に埋め込まれた幼児の自己主張行動や社会的自己の発達の重要な部分が明らかにされている。しかし、一連の研究には、研究の視点と方法において、次の様ないくつかの課題が残されている。

第一の課題は、従来の諸研究では親が子どもの自己主張行動を“調停・制止”する存在としてのみ描いてきた点にある。しかし、自己主張期の子どもは「自律的でありたい」と強く希求する一方、親に強く依存し、親に自己の欲求を理解され受け入れられることで初めて「一個の自己」足り得るある種の脆弱さを持った存在である (石野, 2001)。こうした点を踏まえれば、親により“調停・制止”されながらも“受容”されることで初めて、子どもの自己主張行動は健全な自己の発達へと繋がると考えられる。親による“調停・制止”と“受容”という両義的な応答と子どもの自己主張行動の相互作用という観点からの実証的研究が必要である。

第二の課題は、従来の諸研究が、眼前に生じる子どもの自己主張をめぐる親子のやり取りにのみ注目してきた点にある。幼児期に入り現われる子どもの自己主張は親の心理

状況に多分な影響を与え、その心理状況は子どもへの応答や子どもの自己主張を規定する。また、このような親の心理状況は育児サポートなどの社会的状況に深く埋め込まれている (菅野, 2001)。この様に子どもの自己主張をめぐる親子関係はその背景の親の心理社会的状況と不可分に繋がっている。

以上の点を踏まえ、本研究では子どもの自己主張をめぐる親子関係の新たな枠組みとして、“親子関係の共同発達モデル”を提唱する。親子関係の共同発達モデルは、子どもの自己主張行動、それへの親の両義的応答及びその背景としての親の心理社会的状況の三項が相互規定的・共同的に係わり合いながら発達するという立場に立つものである。

また、従来の研究は研究方法の上でも次のような課題を持っている。第一に、自己主張が出現する以降にのみ焦点を当ててきたという点にある。幼児の自己主張行動が出現することをきっかけに親子の共同発達がいかに進行するかを解明するには、子どもの自己主張行動の出現期からの縦断研究が必要である。第二の課題は、データ収集は近年、現場密着型のものへと移行しつつあるものの、分析や理論構築は、依然として研究者側の作業としてのみ行われ、データ収集の場からは閉ざされたものになっているという点である。この様な研究者占有型の理論を、現実の育児場面を生きる親子の視点に立った理論の構築へと転換することは、発達援助という観点からも必要である。

以上の方法的課題を踏まえ、本研究では、自己主張行動の出現期である2歳前後からの縦断的研究を実施するとともに、現場発信型理論構築を目指した。縦断研究としては、2歳前後の幼児が5歳になるまでの期間、定期的 (調査前半期にはほぼ1.5ヶ月に一回のペースで調査を実施。後半期は3ヶ月に1回のペースを実施。4歳半に達した幼児に関しては、その半年後の5歳児に調査を実施した。)

に調査を実施した。また、現場発信型理論構築としては、調査で捉えられた母子のやりとりを母親自身に振り返り解釈をしてもらうことで、母親から提示された現象の捉え方と研究者側の捉え方をつなぎ合わせながら理論の構築を目指すという方法をとった。

2. 研究の目的

以上のような研究の背景を踏まえ、本研究では、乳幼児期の自己主張行動と親の両義的応答の関係性、および、その背景としての親の心理・社会的状況の共同発達過程を縦断的に分析し、現場発信型の理論を構築することを目的とした。具体的には2歳の子どもとその親を対象とする調査を実施した。調査はインタビュー調査と実験調査により構成され、実験調査では、実験者が用意したパズルを母子で取り組んでもらい、そのやりとり（子どもの自己主張行動、自己抑制行動／母親の関わり等）を観察・記録した。パズルとはスタートとゴールが明確であり、パズルに参加する子どもはそのゴールに向かって自己の行動や感情をコントロール（自己制御／自己主張行動と自己抑制行動）していくこととなる。また、パズルは親子が共同して関わるのに適した道具であり、このパズルを介して展開される親子の共同的やり取りに埋め込まれた形での幼児の自己主張行動や自己抑制行動を捉えることが可能になる。

またインタビューは一回の調査において実験前と実験後に二度実施し、実験前のインタビューでは、日常の母子のやり取りの中に見られる子どもの自己主張・自己抑制行動およびそれに対する母親の対応や感情や、その状況的背景について聴き取りを行った。実験後のインタビューでは、母親に実験の様子を録画したのを見てもらって、母子の行動や相互のやりとりについて気づいたことを自由に語ってもらった。

以上の調査により、母子の共同発達過程としての自己制御機能の発達過程を明らかに

するとともに、それを母子のやり取りと表裏一体をなす親の認知的枠組みや価値観、更には、日常生活でのインタビューを通して、その周辺をなす母子の生活状況といった広い射程の中で明らかにしていくことを目指した。

3. 研究の方法

(1) 調査協力者・調査期間

東京都在住の2歳前後の子どもとその母親を対象として調査協力者を募集し、調査協力の承諾を得た7組の母子（男児4名、女児3名）を対象に調査を実施した。対象児は皆、調査実施においては末子であり、そのうち、3名は第二子、2名は第一子であり、第三子と第四子がそれぞれ1名であった。

(2) 調査期間

上記7組の母子に対して、5歳1か月頃までの縦断調査を実施した。調査前半期にはほぼ1.5ヶ月に一回のペースで調査を実施し、後半期は3ヶ月に1回のペースを実施した。4歳7か月に達した幼児に関しては、その半年後の5歳1ヶ月に調査を実施した。

(3) 調査手続き

調査は調査協力者の自宅で実施した。各回の調査は、(1) 前回調査以降の普段の生活における対象児の自己制御に関する面接調査、(2) 母子協働でのパズル課題、(3) パズル課題の振り返り、の3つのフェーズに分かれていた。そのうち面接調査は母親を対象として行われた。

面接内容については、毎回の調査で、(1) 前回調査からの自己主張行動・自己抑制行動の変化とその詳細（状況など）、(2) そうした行動や変化が生じた理由やきっかけについての母親の考え、(3) そうした行動に対する母親の対応と対応時の気持ち、については必ず聞くようにし、面接の流れのなかで、関連した事柄についても聞き取りを行った。また、第1回目の面接では、対象児と母親の

属性（名前、年齢、職業など）、家族構成、父親の育児参加状況、対象児の特徴（性格、自己主張の状況など）など基本的な事らについても聞き取りを行った。母子協働でのパズル課題の後の振り返りインタビューにおいて、普段の自己制御行動に関連したことがらについて述べられている場合には、それについても本論文の分析対象とした。面接内容は、協力者の同意を得た上で全て録音された。

4. 研究成果

(1) 第一回目のインタビュー調査で明らかにされたこと：きょうだいの育児経験が引き起こす親の育児行動の対象化について

本縦断調査における第一回目のインタビュー調査では、対象児の特徴や母親の育児態度、及び、その背景をなすと考えられる家族構成や母親の育児経験や価値観などについて幅広く語ってもらった。その分析結果により以下の点が明らかにされた。

①子どもの自己主張・自己抑制と母親の応答性とその背景 インタビューにおける母親の語りから、子どもの自己主張的行動とそれに対する母親の受容的応答性が典型的な親子関係のパターンとして見出された。自身の育児行動の理由として、9人中6人の母親が、「注意しても聞かない」「注意するとますます騒ぐ」と語るなど、対象児の年齢特有の特徴を理解していた。また、子どもの特徴や母親自身の育児行動への理解の枠組みとして、対象児にきょうだいがいる母親のほとんどが、きょうだいの特徴やきょうだいへの育児行動を参照していた。これらの母親がきょうだいへの育児に比べて対象児への育児の方が「余裕がある」と語ったことも含め、きょうだいへの育児が母親の対象児への理解や関わり方に関与していることが示された。

②きょうだいの育児経験が及ぼす影響：更に、対象児にきょうだいのいる母親の語り、そのきょうだい数によって質的に異なるこ

とが示された。きょうだい数が多い母親ほど「兄弟への育児の経験を踏まえて意識的にコントロール」に言及していた（4 ケース）。これら4 ケースの母親の語りを見ると、対象児が第3子、第4子の母親は、きょうだいが幼児であったときの自身の育児のあり方を、そのきょうだいの今の様子を参照しながら、対象化し意味づけ、現対象児への育児行動を調整するといった、「自身の育児行動および育児行動の子どもへの影響」をセットにした形での育児行動の対象化が見られた。

(2) 2 歳前半児の母親のインタビュー調査で明らかにされたこと：幼児の2 歳前半期（2 歳0 ヶ月～2 歳5 ヶ月）に見られる自己制御行動の発達過程について：

①子どもの自己主張・自己抑制について：子どもの自己主張行動・自己抑制のプロトコルからカテゴリーを設定した。そのカテゴリーは、「他者の意図と自己の意図の調和の有無」「外界へのスクリプト理解の有無」の二つの次元により整理されることが見いだされた。「他者の意図と自己の意図の調和の有無」は、子どもの自身の主体的行動であるが、そこに他者の意図が融合されているものと、他者の意図や要求が無視・度外視されているものに整理される。「外界へのスクリプト理解の有無」は、単発的な自己の欲求の実現やこだわりにあたるものと、外界のスクリプト（子どもを取り巻く状況、ルール、また、他者の意図やプランなど）を理解しそれに同調させる形で自己の意図を実現するものに整理される。これらの次元は多くの母親が語る「語彙の獲得、言葉の理解」といった言語発達が深く関連している可能性があるとともに子どもの自己制御機能の発達を理解する上でも有効な視点であると考えられる。

②母親の応答について：母親の応答に関するカテゴリーをインタビューのプロトコルから設定したところ、「誰の意図を優先するか？」の点から整理すると、カテゴリーの数

だけを見ても、子どもの意図よりも親の意図を優先していると考えられる応答が圧倒的に多かった。更に、その親の意図を優先する応答を「母親からの強制の強さ」という点から整理すると、「説明的方向付け」や「ほめる」に比べて、「無理やり進める」「怒る」「説明なしの禁止」いった比較的母親からの強制が強いと思われる応答が目立っており、「子どもの意図を優先する応答性」や「母親からの強制の緩やかな応答性」といった応答性の選択は、子どもをコントロールする上で極めて難しいという現実が、母子の具体的に生活の中には多く存在する可能性を示唆された。

③2歳前半児の自己主張的行動が発生する文脈：行動の理由・親の反応・その後の子どもの行動について：「身体的・言語的能力」（「口で勝てないので」「疲労している・眠いから」等）により発生する「初期コミュニケーション的自己主張」（「拒否（いやいや）」等）とそれに対する母親の「説得的コントロール」（「言葉で諭す」等）という文脈（文脈1）と、「模倣・真似」（「上のきょうだいやっているから」）により発生する「主体的行動・自主的行動」（「自分がやる」等）とそれに対する母親の「放任・放置・無視」（「気の済んだところで制止」等）という文脈（文脈2）が見出された。文脈1は、欲求を、それを表出する適切な術がないままに表出する子どもに対して、それを教え諭す母親であり、文脈2は、自発的に周囲の他者からふるまい方を学びそれを実践するといった目的性を持った子どもと、それを静止せず黙認する母親である。これらの各文脈は子どもの自己主張的行動は親・きょうだい・自己の状況等が布置する場に埋め込まれて発生すること、また、そういう視点から子どもの自己主張的行動を捉える必要があることを示唆した。

(3)2歳後半以降の対象児の母親へのインタビューについて：以上の2歳前半のインタビューデータの分析から、2歳後半以降～5歳までのインタビューデータを捉えるための枠組みを構築した。その結果、上位カテゴリーとして、「0. 場面や場所 1. 子どもの行動」「2. 親の対応」「3. 発達に関連する要因」「4. 他者との関係」「5. 前回の調査からの変化について」「6. スクリプト・意図・文脈」を設定した。子どもの自己制御機能（自己主張・自己抑制）をめぐる親の共同発達過程自体は、「1. 子どもの行動」「2. 親の対応」により捉えられるが、他の上位カテゴリーにより分析の射程が広がることで、親子のやりとりをめぐる社会文化的状況をも含めた分析が可能になる。また、これらの上位概念には以下のように細かな下位概念が含まれており、その細かい質的变化により縦断研究ならではの微細で、かつ、確かな発達過程が捉えられる。

0. 場面や場所
 - 0-1 場面
 - 0-2 場所による違いについて
1. 子どもの行動
 - 1-1 子どもの自己主張的行動（内容）
 - 1-2 子どもの自己主張的行動（理由）
等 9カテゴリー
2. 親の対応
 - 2-1 （主張）親の対応行動の内容
 - 2-2 （主張）親対応理由
 - 2-3 （主張）親対応気持ち（理由以外）
等 9カテゴリー
3. 発達に関連する要因
 - 3-1 言葉の発達状況
 - 3-2 育児についての母親の考え
 - 3-3 子どもの性格 等 9カテゴリー
4. 他者との関係
 - 4-1 兄弟姉妹との関係
 - 4-2 祖父母との関係
 - 4-3 父親母親間での育児分担
等 7カテゴリー
5. 前回の調査からの変化について
 - 5-1 変化の内容
 - 5-7 母親側の変化
 - 5-8 環境変化の内容 等 8カテゴリー
6. スクリプト・意図・文脈
 - 6-1 スクリプト／ルールの理解
 - 6-2 親子間での意図のズレ
 - 6-3 親の意図への関心・注意
等 5カテゴリー

今後は、これらのカテゴリーにより、母子の自己制御機能をめぐるやりとりと、その発達過程に関連する諸要因との関係性を明ら

かにすることで、母子の共同発達過程の一側面としての幼児の自己制御機能の発達過程を母親の心理社会状況をも視野に入れた形での微細な分析を試みていく。

(4) 映像データについて

映像データに関する分析を通して、以下のようなカテゴリーを設定した。

1. エピソード区分
 - 1-1. パズル準備
 - 1-2. パズル作業
 - 1-3. パズル変更等 5 カテゴリー
2. 視線
 - 2-1. 相手の顔・目
 - 2-2. 相手の動き
 - 2-3. パズルやピース等 8 カテゴリー
3. 共同作業状況
 - 3-1. 子どもイニシアチブ型
 - 3-2. 母親イニシアチブ型
 - 3-3. 母子共同型等 6 カテゴリー

「母子の共同発達過程」を捉えるために、母子の共同作業と母子の共同注意の二つの側面に注目した。母子の共同注意の母子の共同発達過程の基盤になりうるが、更に、母子の関係性を捉えるために、共同作業状況として、課題解決のイニシアティブをとるのは母か子か、あるいは両者か、といったことを中心に設定されたカテゴリーを抽出した。これらのカテゴリーによる分析を通して、今後更なる、パズル課題への取り組みに見られる共同発達過程の様相とそこでの子どもの自己制御機能の発達過程を明らかにすることができるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 渡部朗代・竹尾和子(2013). 2歳前半児の課題解決場面における意図の調整: 母親の応答的介入との関連から. 生涯発達心理学研究. 第5号. 111—123.

〔学会発表〕(計6件)

1. 竹尾和子・渡部朗代(2013/3/16). 自己主張期の幼児に対する母親の養育行動—きょうだいの育児経験が引き起こす

親の育児行動の対象化. 日本発達心理学会第24回大会.

2. 竹尾和子・渡部朗代(2013/8/19). 親子の共同発達として捉えた子どもの自己制御機能(1)—2歳前半の子どもの自己制御機能の発達—. 日本教育心理学会第55回総会発表論文集. 585.
3. 渡部朗代・竹尾和子(2013/8/19). 親子の共同発達として捉えた子どもの自己制御機能(2)—2歳前半児に対する母親の応答性の発達—. 日本教育心理学会第55回総会発表論文集. 586.
4. 竹尾和子・渡部朗代・渡辺忠温(2014/3/21). 親子の共同発達として捉えた子どもの自己制御機能(3)—2歳前半児の自己主張的行動が発生する文脈: 行動の理由・親の反応・その後の子どもの行動. 日本発達心理学会第25回大会. 121.
5. 渡部朗代・渡辺忠温・竹尾和子(2014/3/21). 親子の共同発達として捉えた子どもの自己制御機能(4)—2歳後半児に対する子どもの自己制御機能. 日本発達心理学会第25回大会. 122.
6. 渡辺忠温・竹尾和子・渡部朗代(2014/3/21). 親子の共同発達として捉えた子どもの自己制御機能(5)—2歳前半児に対する母親の応答性の発達—. 日本発達心理学会第25回大会. 123.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者 竹尾和子 (TAKEO, Kazuko)
東京理科大学・理学部・講師
研究者番号: 30366421

(2) 研究分担者 研究者番号:

(3) 連携研究者 研究者番号: